

天保四年東本願寺門跡達如の関東参向

松 金 直 美

はじめに

近世史研究の成果を意識した近世仏教史の主要な研究視点として、次の二点をあげることができる。⁽¹⁾

(1) 国家史をふまえた仏教教団史

(2) 地域社会史の方法論を取り入れた宗教社会史

(1) (2) に関連する研究は従来、組織・制度論を中心とする教団史と、地域社会や民衆を主体として仏教に言及する立場とに分断しており、双方において他方の視点が欠如しているという問題性を孕んでいるように感じる。両視点による研究成果を有機的に接合させた上で、近世仏教について検討する必要があるのではなからうか。

近年の近世史研究において、領主・民衆の「合意」「契約」とい

う側面に注目しつつ、政治支配を担った諸主体と民衆・地域社会との影響関係を明らかにするため、両者の接点となる領域へ着目しようとする動向がみられる。⁽²⁾ 仏教史研究においても、門跡をはじめとする教団上層と門徒・地域社会との関係を、両者の接触する場・事態を取り上げることと検討していくことが必要ではなからうか。かかる課題に有効な事象として、本願寺門跡による各地への下向、あるいは関東（江戸）への参向がある。

近世門跡研究は、柚田善雄氏や高埜利彦氏などによって進められ、近世国家における門跡の制度や格式の変遷が明らかにされてきた。また主に宮門跡や摂家門跡が取り上げられ、朝廷社会における位置づけを検討する研究も蓄積されてきている。⁽³⁾

本稿では、東本願寺門跡の関東参向を取り上げ、近世における東本願寺の門跡ならびに教団の社会的位置を考察していきたい。

血脈により継承される准門跡の東本願寺を取り上げること、新たな近世門跡の側面を明らかにすることを目指したい。歴代門跡の中でも多くの下向・参向が確認され、また下向・参向の形態や目的が変容していった時期と考えられる二〇世達如(一七八〇～一八六五、在位：一七九二～一八四六)に着目する。特に、天保四年(一八三三)に実施された達如と新門主である宝如(一八一三～四一)が同道した関東参向を取り上げる。

その際、①門跡をはじめとする教団上層、②幕藩権力、③民衆(門徒)・地域社会、三者の関係性に留意することにつとめたい。また本稿での考察を進めることは、特に次の二点を明らかにすることにつながると思われる。

(1) 道中の諸藩がいかなる対応をとったかに着目し、東本願寺門跡ひいては東本願寺教団に対する藩権力の姿勢を検討していきたい。それは、国家権力との関係から仏教教団について考察するという課題に結び付く。

(2) 道中で迎える人々や立ち寄った各地の寺院での在り方をみることで、地域社会での門跡一行に対する認識・対応を明らかにできる。

一、門跡達如による下向・参向の概要

『大谷嫡流実記』⁽⁵⁾によれば、達如は生涯において一四回、下向・参向に赴いている【表】。最も多いのは、堺・八尾・難波・天満の

各御坊などへの「大坂下向」九回(大和・摂津への下向を含む)である。その目的は、親鸞の御遠忌などへ出仕するためである。また文化七年(一八一〇)、弘化四年(一八四七)、嘉永三年(一八五〇)、安政五年(一八五八)には、親鸞・蓮如の御遠忌出仕のために各地の御坊へ下向している。

達如以前の歴代門跡の場合、下向より参向が多い印象をうける。各地の御坊への下向を増加させたことが達如期の特徴ではなからうか。そこには当該期の教団における何らかの方針が働いているようにも感じる。

「関東参向」は四回実施している。文化十二年(一八一五)には、東照宮二〇〇年神忌のため「如御流例」として日光社参している。また天保十四年(一八四三)に達如は、厳如を伴って、「日光御登山御拝礼」している。

二、本願寺門跡による関東参向の様相

1 天保九年西本願寺門跡広如の関東参向

本願寺門跡が下向・参向する際の行列はどのようなものであったのかを知る手がかりとして、「天保九年西本願寺門跡広如関東参向行列の図」⁽⁶⁾【図1】を紹介したい。本行列図は、天保九年(一八三八)二月六日に西本願寺を出発した、西本願寺二〇世広如(一七九八～一八七一、在位：一八二六～七二)の関東参向を描いたとされるものである。駕籠にのる門跡が富士山を横手に、多くの

【表】 達如下向・参向一覧

年齢(数え)	出 立	帰 洛	行 先	備 考
11 歳	寛政 2 年 (1790) 10 月 16 日	寛政 2 年 11 月 6 日	大坂堺八尾等	乗如と姉始君と同道にて。
17 歳	寛政 8 年 (1796) 2 月 10 日	寛政 8 年 4 月 15 日	関東参向	——
18 歳	寛政 9 年 (1797) 8 月 17 日	寛政 9 年 8 月晦日	大坂堺	——
25 歳	文化元年 (1804) 4 月 1 日	文化元年 4 月 18 日	大坂堺	——
30 歳	文化 6 年 (1809) 3 月 20 日	——	大坂堺八尾等	御遠忌引上。
31 歳	文化 7 年 (1810) 4 月 7 日	文化 7 年 4 月 24 日	播州姫路本徳寺	親鸞 550 回御遠忌修行。
36 歳	文化 12 年 (1815) 3 月 4 日	文化 12 年 5 月 6 日	関東参向	東照宮 200 年神忌のため流例のように日光社参。
38 歳	文化 14 年 (1817) 2 月 7 日	文化 14 年 2 月 15 日	大坂下向	——
44 歳	文政 6 年 (1823) 3 月 11 日	文政 6 年 5 月 6 日	北国越後下向	親鸞旧跡順拝。この時、信州善光寺へも参詣。
48 歳	文政 10 年 (1827) 4 月 10 日	文政 10 年 4 月晦日	大坂堺下向	——
54 歳	天保 4 年 (1833) 2 月 7 日	天保 4 年 4 月 23 日	関東参向	新門主宝如同道。
64 歳	天保 14 年 (1843) 7 月 20 日	天保 14 年閏 9 月 10 日	関東参向	厳如が新門主の時、同道して関東へ参向。日光登山拝礼あり。両門主が將軍家から別段浜御殿で饗応を受け、さらに葵紋付網代の箱 1 つを拝領。
65 歳	天保 15 年 (1844) 8 月 16 日	天保 15 年 9 月 23 日	大坂堺下向	厳如が新門主の時、同道して大坂堺下向。厳如は 9 月 3 日、大坂から還御。達如は 9 月 2 日より、①摂州有馬入湯、②上ノ太子（叡福寺：大阪府南河内郡太子町）の廟屈（磯長の太子廟）拝礼、③八尾御坊、④大和の寺社順拝、⑤多武峯に登山して、大織冠（藤原鎌足）の廟を拝礼。
68 歳	弘化 4 年 (1847) 4 月 19 日	弘化 4 年 5 月 16 日	越前吉崎御坊	越前吉崎御坊での蓮如 350 回御遠忌修行。この度、將軍家并日光様同様の網代輿にて旅行。ただしその形は、輿の前下の方が出ている。
71 歳	嘉永 3 年 (1850) 3 月 26 日	嘉永 3 年 4 月 18 日	大和・摂津への下向	①和州教行寺再建成就。拝礼のため、そして多年延引していた同寺の親鸞御遠忌（550 回忌）に出仕するために赴いた。②和州吉野遊覧。今年は役ノ行者小角 1500 年忌にあたり、吉野山で行者影像が開帳されたので、参詣した。③大坂難波御堂・堺御坊所にて蓮如 350 回御遠忌修行。④枚方駅より帰洛。
79 歳	安政 5 年 (1858) 3 月 10 日	安政 5 年 4 月 12 日	大坂下向	難波・天満・堺・八尾の四御坊所において、親鸞 600 回御遠忌を修行した。そのため、達如・厳如が下向。同年 4 月 12 日、達如は東殿へ還御。

※『大谷嫡流実記』（平松令三編『真宗史料集成』7、同朋舎、1976 年）をもとに作成。



【図1】天保九年西本願寺門跡広如関東参向行列の図

供を引き連れた長蛇の行列にて東海道を進む様相として描かれている。またその行程と、道中で多くの講中の人々が一行を送迎する状況について記述されている。この関東参向に関しては、『広如上人芳績考』⁽⁷⁾の天保九年条にも「九年二月上人江戸ニ如キ。帰路名古屋・黒野・岐阜・福井・吉崎・及ヒ長沢等ヲ巡化シ。閏四月ニ至テ帰山ス。」と記されている。⁽⁸⁾

2 歴代東本願寺門跡による名古屋御坊立ち寄り

次章にて、天保四年（一八三三）に実施された達如と新門宝如（一八一三〜四一）の関東参向にあたり、名古屋御坊へ立ち寄った際の状況を紹介する。それに先駆けて、それ以前の関東参向において門跡が名古屋御坊へ立ち寄った際の状況を紹介しておく。

元禄七年（一六九四）、一六世一如（一六四九〜一七〇〇、在位一六七九〜一七〇〇）と新門真如（一六八二〜一七四四、在位一七〇〇〜四四）が関東参向している。⁽⁹⁾元禄七年二月八日に、新門真如が法印に叙せられたことをうけ、一如・真如は、登城して御礼挨拶するため、同月二十六日に関東参向へ出立したのである。三月十三日に登城を果たし、帰路である同年四月十〜十二日、名古屋御坊へ立ち寄っている。これが門跡による名古屋御坊への立ち寄りの最初である。またこの一行は総勢五〇〇人余りであったと伝える『御坊由緒記』。名古屋藩士である朝日重章の日記『鸚

鶴籠中記』によれば、その際、多くの人々が群集し、倒されてしまった人も数え切れないほどおり、氣絶してしまふ老人や、押し殺されてしまった赤ん坊もいたという。また御剃刀を受けた者が二日間（十ゝ十一日）で七〇〇人余りもいた。尾張藩二代藩主徳川光友（一六二五ゝ一七〇〇）のみならず、家老・老中や奉行・同心などにまで、門跡から音信物があつた。そして、この二日間で七〇〇両余りが集まつたという。

元禄十五年（一七〇二）二月、一七世真如は関東参向へ出立した。⁽¹⁰⁾ 帰路の同年四月七日、名古屋御坊に立寄っている。『鸚鵡籠中記』の著者は、東本願寺門跡の通行に際して、群集して多額の賽銭を上納する人々を批判的にとらえている。

文化十二年（一八一五）三月四日、達如は関東参向へ出立し、⁽¹¹⁾ 帰路の四月二十六ゝ二十七日に名古屋御坊へ立ち寄っている。その際の状況が尾張藩士である猿猴菴（高力種信、一七五六ゝ一八三二）の執筆した『絵本富加美草』や『東御坊繁昌図会』に記されている。『絵本富加美草』には、御坊に群集する人々を描いた挿絵とともに、次のように記されている。⁽¹²⁾ 『東御坊繁昌図会』もほぼ同様の内容である。⁽¹³⁾

此春ハ御本山御門主東関に趣かせ給ひし帰京のついで、当所に宝輿をとどめさせ給ふ事、四月末の六日、七日の二ヶ日なり。遠近の信俗を化益し給はんため、兼て本堂の代として仮の高楼、或は行廊等をもいとなみ、幕を打、翠簾をかけ、さ

まゝに莊嚴せり。拝礼の道俗男女群詣のさまたとふるに物なし。此うち廿七日の夕つがた、再建の作事場、地行のていをも歴覽し給ふ由、いとも尊ければ具にハ誌さず。其賑合の百が一をあらはして筆の留りとハなし畢。

于時文化十二年乙亥初秋下旬 尾達左 猿猴菴図之「印」

再建中であつた名古屋御坊では、仮の高楼や渡廊をつくり、幕を張り御簾をかけるなど莊嚴をした。そこには門跡を一目でも拝みたいと押し寄せる道俗男女が群集したという。また門跡は、再建の作事場や地築の様子も視察してまわつた。門跡にとつても御坊を支える多くの人々と接する貴重な機会となつたことであろう。

三、天保四年（一八三三）達如・新門宝如の関東参向―名古屋御坊への立ち寄り―

1 天保三年春の関東参向へ向けて

天保二年（一八三一）二月十九日、東本願寺は京都所司代の松平資始へ、天保三年春に関東参向を行いたいと願ひ出た。その目的は次の二点であるという。

（一）新門宝如が、文政七年（一八二四）九月二十三日に得度し、文政十年（一八二七）三月四日に大僧正へ転任した事の御札と報告。

（二）文政十年五月十日に再建事業を進めている東本願寺へ、飛

州御林からの材木が着木した。その材木を拝領したことの御⁽¹⁴⁾礼を伝える。

これまで新門が得度した際、翌年に参向する旧格であった。しかし新門が幼いことや文政六年（一八二三）に東本願寺が焼失したことにより、延引されていた。それを今回願ひ出ている。参向願ひを受け取った京都所司代は、幕府（老中）へ届け出て判断を仰ぎ、返答を受けて、許可した。⁽¹⁵⁾

ところが天保三年（一八三二）一月末、新門宝如の持病が再発したため延引されることとなった。⁽¹⁶⁾得度と大僧正転任を済ませた宝如が將軍へ挨拶することを目的の一つとする今回の関東参向において、延期はいたしかたなかった。

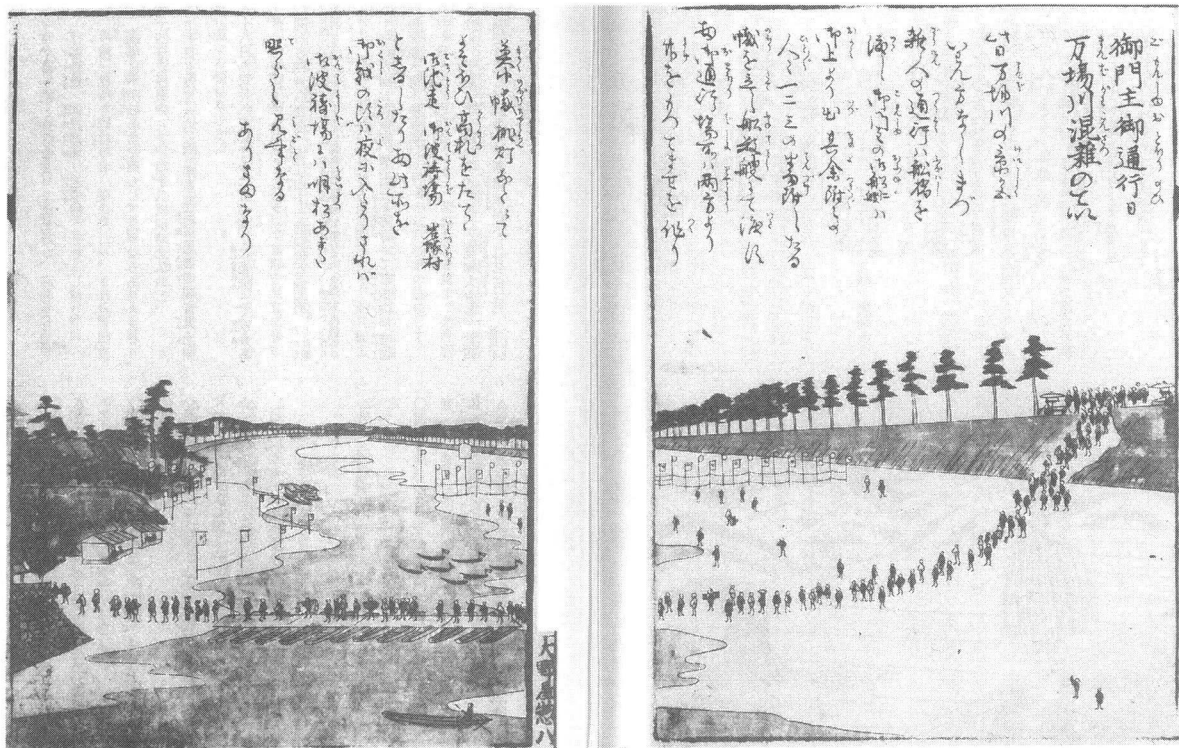
2 天保四年春の関東参向実施―往路における名古屋近辺通行の状況―

天保四年（一八三三）一月十四日、当春に延引されていた両門の関東参向を実施することが決まった。往路は東海道、帰路は木曾路を通行すると決定された。⁽¹⁷⁾そしてついに天保四年二月七日、関東へ向けて発興した。⁽¹⁸⁾翌八日には、近江国水口藩を通過した模様で、同藩において大庄屋をつとめた山村氏が記した日記の同日条に「今日東本願寺江戸御下向御通行在之」と記されている。⁽¹⁹⁾道中に住む人々にとっても東本願寺門跡一行の行列は印象的であったのだろう。

往路では天保四年二月十二日に名古屋近辺を通行した。尾張藩士である画家の歌月庵喜笑（小田切春江、一八一〇～八八）が著し、天保七年（一八三六）に刊行された『名陽見聞図会』には、その様子が記されている。⁽²⁰⁾伊勢国桑名（三重県桑名市）から尾张国佐屋（愛知県愛西市佐屋）までの三里は引船で移動した。その際、途中で船が止まってしまったが、近在の門徒の力により無事、佐屋の港へ着船した。そして佐屋街道から名古屋御坊の近隣である府下古渡（名古屋市中区古渡町）までには、門跡を拝しようとする老若男女の門徒が、幟・提灯を立て連ねて群がった。献上品である金銭を台に並べたそばで、袴を着用して門跡一行を迎える者もいた。畑に鉦を敷いたり松が根に腰掛けて門跡一行を見物する人々は数万人にも及んだという。⁽²¹⁾

また長蛇の列をなして万場川を渡る門跡一行の様子が、挿絵【図2】と文章にて掲載されている。雑人は船橋にて渡り、門跡らは二艘の船で、側仕えの人々は番付した幟を立てた船数艘で渡った。門跡一行の通行場所には、道の両脇に竹で柵（ませがき）を作り、幕・幟・提灯などで飾り立てられた。波止場には「御馳走 御波持場岩塚村」と書かれた高札が立てられた。また夜に入ってから到着のため、多くの松明で一带が煌々と照らし出された。⁽²²⁾

こうして門跡一行は、一路江戸へ向かった。江戸滞在中、三月十八日には上野の寛永寺、翌十九日には芝の増上寺と、徳川家の菩提寺を参詣している。⁽²³⁾



【図2】御門主御通行日万場川混雑のてい（『名陽見聞図会』）

3 帰路における行程の紆余曲折

三月二十六日、門跡一行は江戸を発興した。帰路は木曾路を通行した。三月二十四日付で、門跡一行の供からの書状にて名古屋御坊に立ち寄る可能性も模索されているが、ひとまず立ち寄りは無いものとして取り計らうよう伝えられた。また京都着は四月十五日の予定であった。⁽²⁴⁾ そうしたところ、御嶽宿（岐阜県可児郡御嵩町）に在る門跡達如から、尾張藩寺社奉行所へ次のような内容の書簡が届けられた。当初、名古屋御坊（真宗大谷派名古屋別院）へは新門が立ち寄り、達如自身は岐阜御坊へ向かう予定であったが、急遽、新門が岐阜御坊へ向かい、達如が名古屋御坊へ立ち寄ることになったという。その理由は「兼而門徒共より種々申立候件々之化導」をしたためとしている。⁽²⁵⁾

4 疑念騒動

この門徒らが申し立てている内容というのは、次のような訴えである。東本願寺は天明八年（一七八八）に京都大火によって堂宇を類焼してしまった。再建が成就したものの、多額の借財が残り、文化十年（一八一三）には二十五万両に達していた。そのため借財返済が香樹院徳龍（一七七二～一八五八）と近江国「康」（野洲）の浄満寺らに命じられた。諸国へ演説に回り、門末へ懇志上納を依頼し、文化十年から文政二年（一八一九）までに二十五万両を返済した。その後の三年間にも一類の者が法談に回り、十一

万両取り集めた。したがって合計三十六万両を集めたのだが、二十五万両は借財返済に、一万両は家中一同の給付にあてたものの、残り十万両が使途不明であった。取り調べたところ、なんと下間治部卿をはじめとする重役の者が横領したという噂であり、門末が騒ぎ立てる事態となった。そうしたところ、文政六年（一八二三）、再び東本願寺の堂宇は焼失してしまった。そのため再建を願う諸国の門徒から、次々と材木や金銀が上納されたが、重役をはじめとする悪人共がまたもや横領していると知り、尾張名古屋の門末が幕府へ訴え出たのである。訴えられた相手方は、下間治部卿や川那部帯刀をはじめとする東本願寺家来の重役や寺内などの僧侶、本願寺家来として作事方をつとめる俗人、さらには学僧の香樹院徳龍も含まれていた。このように東本願寺家臣を訴えた人々を「疑念同行」「疑念講中」などと称した。一方、尾張の門末には、東本願寺役人らを擁護する「取持世話方同行」もいた。「疑念同行」からすれば、「本山不正之役人」と馴染み合い、私腹を肥やそうとする人々である。以上が疑念騒動と言われる事件の概要である。⁽²⁶⁾

5 御嶽宿での混乱

天保三年十二月、東本願寺から尾張藩に対して、関東参向のため領国通行すること、名古屋御坊へ立ち寄りたいとの申し出があった。ところが天保四年正月、尾張藩は疑念騒動が未解決の段階であるため、参向のための通行のみであれば構わないが、名古屋

屋御坊への立ち寄りには控えるべきと名古屋御坊輪番へ返事をしてきた。それを東本願寺へ伝えようとした使僧が世話方同行によって名古屋御坊へ引き戻されてしまうなど、騒動がますます大きくなった。そして当初は立ち寄りの予定でなかったが、中津川宿から、急遽立ち寄りが決まったと伝えられた。それを知った疑念門徒数万人が御嶽宿まで向かい、「これまでの本山による不審な行動についての説明がないままでは、名古屋御坊への立ち寄りを認めたい。」と直訴した。一方の世話方同行も御嶽宿に参集し、双方の同行が数日間逗留する事態となった。ついに尾張藩の寺社方・勘定方両奉行所の取り計らいによって、門跡か新門が名古屋御坊へ立ち寄り、「不審之条々」について教諭するとの門跡の証札を疑念門徒へ渡したことで、ようやく一同は引き取った。⁽²⁷⁾

以上の経緯について『名陽見聞図会』には「御嶽宿まで御出ありしに、疑念・取持の両同行に道をささへられて、直に京都へ御帰りもならず、先名古屋懸所へ御立寄にきハマリ」と記されている。

6 尾張藩による規制

門跡一行の通行が決定したことをうけて、領主の尾張藩は四月に入りすぐの段階で、触書を二日と七日に度重ねて出している。⁽²⁸⁾⁽²⁹⁾七日の触書は次のような内容である。

東本願寺両門主関東参向帰路二付、門主旅中遠方迄も泊懸等

二而出迎候義ハ不可然旨、頃日相触候処、此節多人数相越、道中筋おゐて幕などを打、目立候様二仕懸ケ、種々之義申触、人氣騒立候哉之風聞有之候、尤前以相触置候事二付、右躰之儀ハ有之間敷歟二候へ共、若風聞之趣二而者以之外不埒之儀二候間、所役人頭立候者共之内、早速中山道宿々之内え相越、其所々相越居候者等有之候ハ、早速連寄候様可致候、但、居村篤と吟味せしめ、道中筋え門主出迎等二罷出候者無之候ハ、其段以書付早々可相達候、

四月

寺社奉行所

御勘定奉行所

町奉行所

右之通在町東本願寺門徒共え相触之候間、一宗寺院おゐても、右書面之趣篤と相心得、寺中之輩并男女召仕二至迄不洩様可申通辞候、若中山道宿々之内え相越候者も有之候ハ、早速連戻候様可致候、

寺社奉行所

四月

御勘定奉行所

町奉行所

門跡一行を遠方まで泊まり掛けなどで出迎えること、道中筋で幕などを打ち立てて目立つようにすることを禁止している。特に、

中山道の宿々まで門跡一行を迎えに赴くものがあれば、すぐに連れ戻すように、という。疑念騒動による混乱を危惧して尾張藩が触書を出したにも関わらず、それは現実となってしまった。

『名陽見聞図会』には「されバ七日々毎日御門主御迎ひの人々、此府下るも夥しく出て、みたけの道筋ハすき間もなき賑合也。扱、御嶽の近辺ハ食物もなき程の騒動なりし由。」と記されており、御嶽宿周辺の混乱ぶりが知られる。

四月十二日付の書状にて、御嶽宿を出発した後、新門宝如はすぐに岐阜御坊（真宗大谷派岐阜教区東別院）へ向かうものの、門跡達如は名古屋御坊へ立ち寄ると伝えられた。⁽³⁰⁾

7 名古屋御坊への立ち寄り―歓迎する人々―

ついに四月十三日、門跡達如は名古屋御坊へ入興した。往路には名古屋御坊（「掛所」）へ門跡の立ち寄りがなかったため、帰路にはぜひとも立ち寄って欲しいと願う人々も名古屋周辺には多くいたようである。当御坊にはおびただしい人々が群集した。本堂で門跡からじかに御剃刀をうけた人は一八〇人にもものぼったという。挿絵【図3】にあるように、人々は「十一日御花講」「愛知郡惣同行中」「枇杷島講中」など、講・同行中ことの幟を立てて迎えた『名陽見聞図会』。このように門跡へ示そうとした講・同行中という在り方が、門徒にとつてのアイデンティティの根幹としての存在形態であつたのであろう。

8 疑念騒動の鎮静化

名古屋御坊では、疑念門徒の惣代から「願意之ケ条書」が門跡へ提出され、それを一覽した上で、門跡達如は今回の騒動が「役人の不行き届きによるものであるため、帰京した上ですぐに吟味する。」と返答した。⁽³¹⁾

『名陽見聞図会』には「扱、此度、疑念・取持の入組し事、此節二至りても皆済ハせず。但し少し静まるといへり。」とも記されているように、疑念騒動で混乱していた名古屋において、門跡達如が御坊へ立ち寄って騒動の解決へ向けた対応を約束したこと、一定の鎮静化をもたらしたものの、解決へは至らなかった模様で



【図3】御門主入興（『名陽見聞図会』）

ある。

四月二十三日、門跡達如・新門宝如の一行はようやく帰洛した。⁽³²⁾名古屋御坊へ急遽立ち寄ったことにより、当初の予定より到着は遅れることとなった。

以上のように、疑念騒動の渦中にあつた名古屋では、門跡一行の御坊立ち寄りを歓迎する人々と、拒否しようとする人々がいた。門末が二分する騒動が起こり、東本願寺教団や門跡の権威が揺らぎかねない事態であつたからこそ、門跡の権威を可視的に多くの人々へアピールできる御坊立ち寄りが企図され、実現したことによって一定の成果がもたらされた。ただし教団の動揺が露呈する結果ともなった。

四、天保四年達如・新門宝如の関東参向―親鸞旧跡真楽寺への参詣―

天保四年（一八三三）の春に実施された関東参向の際、両門は親鸞旧跡である国府津こうつづの真楽寺（真宗東派、相模国足柄郡国府津Ⅱ現・神奈川県小田原市国府津）へ参詣している。門跡の行列が道中の地域社会や立ち寄った末寺へもたらした影響を顕著に示す一例として、親鸞旧跡である真楽寺への参詣についてみていきたい。

1 真楽寺の由緒

親鸞旧跡である真楽寺の由緒について記した初見は、本願寺八

世蓮如（一四二五～九九）の孫である顕誓（一四九九～一五七〇）が永禄十一年（一五六八）に執筆した『反古裏書』である。

其後相模国アシサケノ郡高津ノ真楽寺、又鎌倉ニモ居シ給ト也。

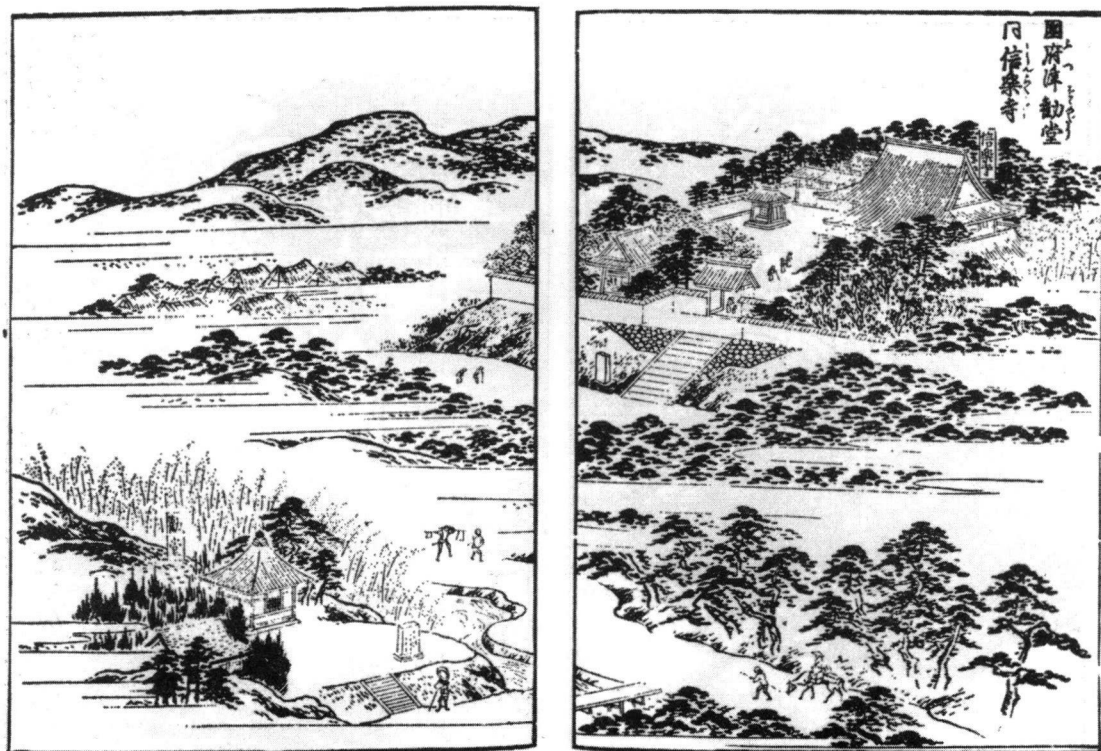
カノ真楽寺御逗留ノ折節唐船来朝セリ。靈石アリ。高サ七尺横三尺式寸、面テハ鏡ノ如シ。裏ハ左ノカタハアツサ一尺ハカリ右ノカタハ五寸ハカリ也。聖人御覽セラレ「是ハ天竺国ヨリノ石也、尊号アソハサルヘシ」トテ、無碍光・不可思議光ノ二尊号ヲ御指ニテアソハサル。左ニハ「右志者」此中間廢滅文字燬不見ト、右ニハ年号、是モ文字慥ニ見ス、「戊十一月十二日自心敬白」ト云。⁽³³⁾六十歳ノ御時コノ所ヨリ宮根山ヲコサレ御上洛アリトナン。七年御居住アリト申伝ヘ侍ル、シカレハ貞永元年ノ比ナルヘシ。

親鸞が真楽寺に七年間居住していた際、唐船にて高さ七尺で横幅三尺二寸の靈石がもたらされた。それを見た親鸞が「天竺国からの石である」と述べ、十字名号（歸命尽十方无碍光如来）と八字名号（南无不可思議光佛）の二尊号を指で記した、という内容である。なおこの後、蓮如も関東行化に際して逗留したという記述が続く。

このように、中世後期には親鸞旧跡としての伝承が形成されており、さらに近世初頭に成立した古浄瑠璃の『親鸞聖人由来』⁽³⁴⁾や

『しんらんき』⁽³⁵⁾にも取り上げられている。そして近世後期に至り、由緒の内容はより具体化されていき、明和八年（一七七二）に刊行された先啓著の『大谷遺跡録』⁽³⁶⁾や、了貞撰述の『二十四輩順拝図会』⁽³⁷⁾に、次のように記されている。親鸞が永勝寺（神奈川県戸塚区下倉田町）で人々を化益した際に設けた草庵では、民衆教化もしたため、その場所を「勸堂」^{すすめどう}と称した【図4、左下】。また「勸山信楽寺」^{すすめざん}は、親鸞が安貞二年（一二二八）から通い、貞永元年（一二三二）から六十二歳の文暦元年（一二三四）八月まで滞留した寺院として伝えている【図4、右上】。『復古裏書』に記述されていた霊石については「名号石」として、次のように伝承されている。高さ七尺、幅三尺二寸の名号石は、もともと異国から一切経を運んだ際に船底にあった石であったが、勝手に震え動いて響き声を出す怪しい石であったという。それを聞いた親鸞が石に十字と八字の名号を書くと怪異は途絶えた。その後、覚如が建武元年（一三三四）十一月十二日、左脇へ「右志者為鏡空行光門弟一向専修念仏者等」、右脇へ「建武元戌十一月十二日同心敬白」と書き添えた。そして、この石の傍らに帰命堂が建立されたという。【図5】

勸堂や名号石【図6】を安置した帰命堂は、現在も親鸞旧跡として伝えられている。



【図4】国府津 勸堂、同信楽寺（『二十四輩順拝図会』）



き めうだうめうがうせき の い
【図5】 帰命堂名号石之図（『二十四輩順拝図会』）

【図6】 現存する「帰命石」（真楽寺境内の帰命堂に安置）



2 帰命堂再建に際する取持（懇志上納）依頼

この真楽寺では、文政十三年（一八三〇）、帰命堂をはじめとする諸堂が大破してしまった。当寺は且家が少ないため、自力での修復は困難であり、江戸浅草御坊所の講中方へ修復の取持（懇志上納）を願ひ出ている。その中で、帰命堂の建立と修復の歴史についても語っている。

乍恐書付を以奉願上候

一、拙寺帰命堂之儀者寛永十三子年之春 東泰院様関東御下向之砌建立可仕旨被為 仰出、普請為金 金貳拾両於小田原宿寂樹院を以拝領被 仰付、其上江戸表惣門徒中江奉加助力被為 仰付、帰命堂御建立被為遊候、其上京都集会所之候釣鐘頂戴被為 仰付鐘樓堂御差図被為遊御奥女郎衆迄江奉加助力可仕旨 被為 仰付、其上願成寺を以為御使僧并御書様御供二而大坂表御門徒中江奉加助力被為 仰付、鐘樓堂御建立被遊候、然ル処其後帰命堂を始諸堂殊之外及破損二、常如上人様御代拙寺少旦家二付帰命堂并諸堂為修マツ覆 金金四拾両被下置、修マツ覆 仕候、其後 一如上人様御代真楽寺帰命堂之儀者格別之事故、難捨置被為 思召、右普請金ニ金子七拾五両頂戴被為 仰付、其上御添状を以、江戸表惣末寺御門徒中江奉加助力被為 仰付候而、修マツ覆 仕候、其後元禄十六末年霜月廿二日関東大地震有之、帰命堂を始、諸堂悉く損シ、拙寺自力二而者難及修マツ覆 候故、

真如上人様御代御旧例を以帰命堂并諸堂再建之儀奉願上候処、如先規之江戸表惣末寺惣門徒并国府津近在奉加義御添状を以被為 仰付、修マツ覆 仕候、然ル処又々享保十九年寅四月 從如上人様御代帰命堂を始諸堂修マツ覆 之義奉願上候処、御添状を以江戸表惣末寺惣門徒中并国府津近在奉加之義被為 仰付、修マツ覆 仕候、其後 乘如上人様御代明和三戌年末夕造作等出来不仕候二付、拙寺伝来之宝物披露之義奉願上候処、江州老ヶ国二お殿ゐて弘通御添状を以被為 仰付候、然処又々此節帰命堂を始諸堂大破二及候二付、旦家内寄セ種々相談仕候へ共、何分二茂少旦家事故、夫成者一日く相送候処、日々之御崇敬仕候二付、茂荒果候有様実々奉恐入候、依之旧例を申立、京都様江願上度存候得共、御再建之御節柄且又奉恐入候、乍去少旦之事候故、迎茂自力二而者難及如何共致方無御座候、依之奉願候者 何卒御坊所講中方江右修マツ覆 御取持之義を御役所方御声懸り被下度御慈悲を以右之通被 仰付被下置候ハ者拙寺者勿論旦家一同難有仕合奉存候、此条偏二奉願上候、以上、

文政十三寅年(38)

寛永十三年（一六三六）春、東本願寺一三世宣如が関東下向した際に普請を命じられて金二〇両を拝領し、さらに江戸表惣門徒中が奉加助力を命じられて建立したと伝える。一五世常如期（一六

四一〇九四、在位：一六六四〇七九）から一八世従如期（一七二

〇〇六〇、在位：一七四四〇六〇）にも、東本願寺からの下付金

や江戸表の末寺・門徒の奉加助力によって修復されていた。一

九世乗如期（一七四四〇九二、在位：一七六〇〇九二）である明

和三年（一七六六）、未だ造作が完成していないため、真楽寺伝来

の宝物披露を願い上げたところ、近江国一ヶ国での弘通が許され

ている。その免許状は次の通りである。

其御坊帰命堂之儀者格別之詔ニ付従 御先代関東御参向之節
者毎度被為遊御参詣年来御引立之恩召候、然ル処近来御堂廻
リ及破損、就中帰命堂之儀者先年難再建有之候、元来少門徒
之儀故、今以周備無之候ニ付、今度依其方願右為助成江州二
おゐて宝物弘通被成 御免候条可被得其意候、依証状如此候
也、

戊四月十日

若林蔵人

直敬（印）

石井隼人

政忠（印）

飼田大膳

辰好（印）

粟津大学

元及（印）

下間治部卿法眼

頼静（印）

相州国府津

御坊

真楽寺⁽³⁹⁾

乗如の先代である従如の頃から関東参向に際して門跡が毎回参詣
していた。その由緒をもつて帰命堂再建助成のための宝物弘通が
願い出されて、許可されたのである。宝物弘通先が、真楽寺の所
在する相模国からは遠方である近江国である点は興味深い。真宗
門徒も多く、近江商人を数多く輩出するなど経済的に豊かであり、
高額の懇志が見込まれたからであろうか。

現存する帰命堂前の石碑には、「帰命堂国府津真楽寺」「寛保元
辛酉年九月十五日、願主宗寿」とあり、寛保元年（一七四一）に
も修復あるいは再建したと考えられる。このように真楽寺帰命堂
は、東本願寺と江戸表（浅草御坊配下）の寺院・門徒によって創
建・維持されてきた。

3 関東参向における門跡の立ち寄りと帰命堂再建

以上のような由緒と修復・再建の歴史を持つ真楽寺帰命堂へ、
当初天保三年春に計画された関東参向の際に両門が参詣すること

となった。そのため天保二年十月、帰命堂・御入御殿が大破して
いるので再建したいが、自力では難しいということで、懇志・助
力を江戸同行一同へ依頼したのが次の史料である。

一、相州国府津真楽寺与申者御開山聖人七ヶ年之間御逗留被遊
御化導被成下候御旧跡御座候、唐土る日本江諸経相渡り候砌、
船之下積ニ到来候石江御開山聖人御指与御爪ニ而御書被遊候名
号石、此寺の宝物与相成、是を従 御本山帰命堂与奉号候、
依之来春両門様江戸御参向之砌者此帰命堂江被成御参詣御拝
礼被遊候、為御宝錢与青差五貫文被下置、尚又両門様る金式
百疋ツ、被下置、暫時御休息被遊候、為旧例与粟黍稗の団子
蕎麦地酒献上仕、尚又豆腐汁ニ而御膳差上申候御旧跡ニ御座
候、然ル所帰命堂御入御殿殊之外大破ニ相成御興被為居候所
も無之次第第二御座候、依之再建仕度存候得共、自力ニ難及候
ニ付、住僧江戸表江罷出御同行衆奉加致度旨御坊所江相願候
得者御聞濟被下御輪番所る世話方の者へ奉加御取持いたし遣
シ候様被仰聞候、何卒御志之御方様多少共御懇志御助力被成
下候様奉頼上候、右信施を以再建仕御参詣被 為在候ハ、
直々両門様江御馳走申上候茂同様与被存、何卒御同行御一統様
より御助力被成下候様、偏ニ奉頼上候、以上、

真楽寺

天保二辛卯年

十月⁽⁴⁰⁾

まず、当寺は親鸞が七年間逗留した旧跡であり、また唐土からも
たらされた石に親鸞が指と爪で名号を記した名号石を宝物として
いる、という由緒を述べている。その名号石を安置した御堂を「帰
命堂」と号するよう本山から許された。このような由緒があるた
め、来春（天保三年）に両門が関東参向する際、帰命堂へ参詣す
る予定であるという。その折、宝錢として青差五貫文と両門から
金二〇〇疋ずつが下し置かれ、しばらく休息することとなった。
そして、あわ・きび・ひえの団子、そば、地酒を献上して、豆腐
汁の御膳にてもてなす旧例であるという。両門が関東参向の際に
立ち寄る帰命堂の再建に懇志を上納することは、両門へじかに馳
走することと同様である、として懇志を依頼している。

関東参向の際に両門が参詣することを契機として、親鸞旧跡の
由緒が改めて確かめられ、旧跡再建が企図されている点は興味深
い。当該期における懇志・助力を募る活動を通して、多くの人々
に親鸞旧跡としての真楽寺が認知されたであろう。また再建され
ることによって、さらに多くの一般の参詣者を集めることが可能
となったのではなからうか。

関東参向に際して参拝する門跡へ饗応することに關しては、天
保十二年（一八四二）成立の『新編相模国風土記稿』⁽⁴¹⁾にも記され
る。

本山門跡江府参向の時は、必参拝あり、（此時門跡を饗応する
に、黍稗米の三品を団子に製し、且砂糖と号し、製方の龜

なる蕎麦切を進め、又土地にて醸せる野酒を捧ぐるを例とす、是古へ宗祖の難苦を知しめんが為めなりといへり、

前掲した天保二年に江戸同行中へ懇志・助力を依頼した際の記述と重なる。寺院で伝来した由緒が地誌に記載されることで、関東参向に際して門跡が参拝し、さらにその折に饗応する格式をもつ寺院として、社会的な認識が定着していったと考えられる。

実際には天保四年に実施された関東参向に際し、当寺へは往路である天保四年二月二十八日に入堂している。

おわりに

東本願寺門跡の関東参向というテーマにおける論点をまとめておきたい。

① 門跡達如にとつての参向

門跡達如にとつて下向・参向に際し、国府津真楽寺などの親鸞旧跡を巡拝してその由緒を実感することは、親鸞を宗祖とする真宗の流れをくむ東本願寺の門跡たる自らのアイデンティティ形成に結びついたであろう。

② 藩権力の対応

天保四年（一八三三）に実施された門跡達如・新門宝如の関東参向の折、一行が帰路に名古屋近辺を通行するに際し、尾張藩は

門跡一行を遠方まで泊まり掛けなどで出迎えることや、道中筋で幕などを打ち立てるなど目立つようにすることを禁止している。門末を二分した疑念騒動で動揺する名古屋御坊へ門跡が立ち寄ることに難色を示しつつも止められず、度々触を出して規制したもの、¹⁾「疑念同行」と「世話方同行」が御嶽宿で衝突してしまった。東本願寺教団内で解決し得ない騒動において裁定を求められたが、対応に苦慮する尾張藩の姿がみられた。

③ 道中の寺院への影響

天保四年の関東参向に際して、門跡一行が名古屋近辺を通行する際、老若男女の門徒は街道や、名古屋御坊へ群参した。その際、提灯や講・同行中ごとの幟を立て連ねた。生き仏として門跡をあがめる門徒にとつて、自身のアイデンティティの根幹である講・同行中としての存在を門跡に示すことが信仰心の発露であったのではなからうか。ただし疑念騒動の最中にある名古屋御坊へ門跡が立ち寄ることで、騒動が鎮静化した一方で、門跡や本山の権威の動揺が露呈する結果ともなった。

親鸞旧跡である国府津の真楽寺では、関東参向の折に門跡一行が参詣する事を機に、旧跡の再建が企図された。懇志・助力を募る活動は、当寺の由緒が改めて確かめられてより広く流布する契機となった。地域と本山とを取り結ぶ由緒が門跡の参向によって再生産され、さらに旧跡復興により参詣者を増加させることで、

地域の変容・形成を生み出していったと言えるのではなからうか。

④メディアによる広がり

天保九年の西本願寺門主広如の関東参向は、刷物として頒布された。また、天保四年の門跡達如・新門宝如の関東参向は、『名陽見聞図会』にて名古屋近辺を通行する様子が詳細に描かれ、『新編相模国風土記稿』において真楽寺に伝来した由緒と旧例について掲載された。このように、刷物や地誌にて、挿絵も伴って門跡の関東参向の実態が流布することは、実際に門跡一行を目の当たりにした人々を超えて、さらに多くの人々へ門跡の権威性を伝えることとなったのではないか。宗教的権威に揺らぎが生じたからこそ、下向・参向を増加させ可視的に門跡の存在を社会に示していくとする教団の方針が明確化したのが達如期であったのではなからうか。

- (1) 澤博勝「近世宗教史研究の現状と課題」(『近世の宗教組織と地域社会―教団信仰と民間信仰―』、吉川弘文館、一九九九年) など参照。

- (2) 「近世の政治支配と社会変容―民政の担い手の視座から―」(『歴史学研究』八七二、青木書店、二〇一〇年) ほか。

- (3) 高埜利彦「近世の僧位僧官」(『近世日本の国家権力と宗教』、東京大学出版会、一九八九年、初出一九八〇年)、杣田善雄

『幕藩権力と寺院・門跡』(思文閣出版、二〇〇三年)、高埜利彦「近世門跡の格式」(『国家権力と宗教』近世の宗教と社会二、吉川弘文館、二〇〇八年)、杣田善雄「門跡の身分―宗門の頂上―」(『権威と上昇願望』(江戸)の人と身分三、吉川弘文館、二〇一〇年)。

- (4) 達如の長男。新門主である天保十二年(一八四一)に二十九歳で没したため、門跡を継承してはいない。(『大谷嫡流実記』平松令三編『真宗史料集成』七、同朋舎、一九七六年、参照)。

- (5) 神田信久著。本書冒頭に、弘化二年(一八四五)正月下旬の序文と嘉永四年(一八五二)に増補加筆したとの追記がある。底本は、嘉永六年(一八五三)に著者の甥である神田久伯が清書し、著者信久が朱筆で註を加えた著者手沢本である。(北西弘「神田寿海編 大谷嫡流実記について」大谷大学編『大谷嫡流実記』、真宗大谷派出版部、一九七二年)、「解題」(前掲註(4)『真宗史料集成』七)。

- (6) 同朋大学仏教文化研究所蔵。縦三四・八cm×横九八・一cm、継紙。『本願寺史』二(浄土真宗本願寺派宗務所、一九六八年、六五三頁)にも掲載されている。なお『歴史の広場』一六(大谷大学日本史の会、二〇一三年)にて、詞書の全文翻刻と行程を紹介している。

- (7) 本書は明治三十五年(一九〇二)二月宗主が生前皇事につ

くした功によって贈位されたのを記念して、『教海一瀾』社が編集刊行したもの。

- (8) 『新編真宗全書』史伝編六(思文閣、一九七六年、五〇一頁)。
- (9) 『名古屋別院史』通史編(真宗大谷派名古屋別院、一九九〇年、一七三〜一七五頁)。
- (10) 前掲註(9)『名古屋別院史』通史編(一七九〜一八〇頁)。
- (11) 『大谷嫡流実記』前掲註(4)『真宗史料集成』七。
- (12) 『名古屋別院史』史料編・別冊(真宗大谷派名古屋別院、一九九〇年、一一〇頁)。
- (13) 前掲註(12)『名古屋別院史』史料編・別冊(一九八頁)。
- (14) 『上檀間日記』文政十年五月九・十日条。(『東本願寺史料』自文化十四至天保五年(達如上人時代)、宗学院、一九三九年)。
- (15) 『上檀間日記』天保二年四月十日条。(前掲註(14)『東本願寺史料』)。
- (16) 『諸事之日記』天保三年一月二十九日条。『諸国書状留』天保三年一月晦日条(前掲註(14)『東本願寺史料』)。
- (17) 『御納戸書翰留』天保四年一月十四日条。(前掲註(14)『東本願寺史料』)。
- (18) 『御堂日記』天保四年二月七日条(前掲註(14)『東本願寺史料』)。
- (19) 『近江国水口藩大庄屋山村氏書留』(甲賀市水口図書館蔵)。

(20) 歌月庵喜笑(小田切春江)著・服部良男編『名陽見聞図会』(美術文化史研究会、一九八七年)、前掲註(9)『名古屋別院史』通史編(二五一〜二五六頁)。

- (21) 前掲註(20)『名陽見聞図会』(二五二〜二五六頁)。
- (22) 前掲註(20)『名陽見聞図会』(二七九〜一八五頁)。
- (23) 『上檀間日記』天保四年三月二十八日条。(前掲註(14)『東本願寺史料』)。
- (24) 『上檀間日記』天保四年四月二日条。(前掲註(14)『東本願寺史料』)。
- (25) 前掲註(9)『名古屋別院史』通史編(二六八〜二七三頁)、『本願寺騒動』(金鱗九十九之塵巻第七拾壹)『名古屋別院史』史料編(真宗大谷派名古屋別院、一九九〇年)。
- (26) 前掲註(25)。
- (27) 前掲註(25)。
- (28) 寺社触添書が四月二日付。芹沢藤蔵。『新編一宮市史』資料編七、一九六七年)。
- (29) 寺社触添書が四月七日付。小清右衛門。(前掲註(28)『新編一宮市史』資料編七)。
- (30) 『上檀間日記』天保四年四月十五日条。(前掲註(14)『東本願寺史料』)。
- (31) 前掲註(25)『本願寺騒動』(金鱗九十九之塵 巻第七拾壹)『名古屋別院史』史料編。

- (32) 『御堂日記』天保四年四月二十二・二十三日条、『上檀間日記』天保四年四月二十三日条(前掲註(14)『東本願寺史料』)。
- (33) 堅田修編『真宗史料集成』二(同朋舎、一九七七年、七四二頁)。
- (34) 『親鸞聖人由来』日野環氏所蔵本、写本。書写された文禄元年(一五九二)を大きくは遡らない時期に成立したと考えられている。『大系真宗史料』伝記編1親鸞伝、法蔵館、二〇一一年、九五頁、四七五～四七六頁)。
- (35) 『寛永古活字版しんらんき』龍谷大学図書館蔵、寛永中期木活字本。『大系真宗史料』伝記編4真宗浄瑠璃、法蔵館、二〇〇九年、十九頁、三四一頁)。
- (36) 細川行信編『真宗史料集成』八(同朋舎、一九七四年、七三〇～七三一頁)。
- (37) 林英夫編『日本名所風俗図会』一八・諸国の巻Ⅲ(角川書店、一九八〇年、五三五～五三六頁)。
- (38) 「両御門跡様関東御参向当寺江御入之扣」天保四年(一八三三)二月二十八日(真楽寺文書①)、「県史写真製本」真楽寺所蔵資料1(神奈川県立広文書館蔵)。
- (39) 「帰命堂再建につき宝物弘通免許状」明和三年(一七六六)四月十日(真楽寺文書⑦)、「県史写真製本」真楽寺所蔵史料12(神奈川県立広文書館蔵)。
- (40) 「祖師聖人七年御居住之地御参向二附帰命堂御入御殿再建」

天保二年(一八三二)十月(真楽寺文書②)、「県史写真製本」真楽寺所蔵資料1(神奈川県立広文書館蔵)。

- (41) 間宮士信ほか編、足柄下郡は天保七年(一八三六)成立。(蘆田伊人編『新編相模国風土記稿』二、大日本地誌大系一五、雄山閣、一八五八年、二四八頁)。

《付記》

本稿作成にあたり、神奈川県立公文書館、甲賀市水口図書館、真楽寺、同朋大学仏教文化研究所には、史料閲覧をご快諾いただきました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。

(同朋大学仏教文化研究所員)